中学生の教師に対する相談行動

―九分割統合絵画における教師イメージとの関連―

小早川茄捺[1]・石田　弓

Junior high school students' consultation behavior with teachers: Relationship with teachers' images in "Nine-in-One Drawing Method"

Kana Kobayakawa and Yumi Ishida

There are many advantages to conducting educational counseling in schools, where teachers are an effective support resource for junior high school students. However, junior high school students are often hesitant to share their issues with their teachers. This study examines how junior high school students' "teachers' images" are linked to "intent of consultation behavior" and "expected costs/benefits of consulting behavior." To examine "teachers' images," we used the "Nine-in-One Drawing Method (NOD)" that allows capturing multiple images at once. For analysis, we divided students into four groups based on the teachers' images indicated by the NOD. The result showed that students who have positive teachers' images were more likely to present consultation behavior. In contrast, students who have negative teachers' images feared that consultation would lead to disclosure of secrets and/or a poor evaluation. Therefore, positive images of teachers are considered important in promoting consultation behavior from students.

キーワード: junior high school students, consultation behavior, teachers' images, Nine-in-One Drawing Method

問　題

１．中学生の教師への相談行動

思春期にある中学生は，急激な身体的・精神的な変化に伴う様々な困難を乗り越えて，人としての成長を遂げていく。しかし，その困難さゆえに不適応状態に陥りやすいことも指摘されている。そのため，保護者や教師などの身近な大人からの援助が必要となることも少なくない。特に学校における援助として，教育相談がある。文部科学省（2010）は，教育相談の利点として①早期発見・早期対応が可能，②援助資源が豊富，③連携が取りやすいことを挙げている。また，援助が必要な

[1] 松江市発達・教育相談支援センター「エスコ」

生徒には，教師が媒介役となって，スクールカウンセラーにつなげたり，外部の専門機関を紹介したりする機能もあり（伊藤，2009），教師は中学生にとって有効な援助の担い手となりうる。

しかし，実際に教師を相談相手に選択する中学生が多いとは言えない状況も示されている。石隈・小野瀬（1997）によると，担任教師を相談相手に選ぶ中学生は 10%であり，他の教師を合わせても中学生が相談相手として教師を選ぶ割合は 17%に過ぎなかった。また，永井・新井（2005a）が中学生に相談経験を尋ねた結果，相談相手は友人，親，教師，スクールカウンセラーの順で多く選択されており，教師が援助者として選択されることは少なかった。

そこで本研究では，まず中学生の教師への相談行動の実態を調査し，中学生にとって教師はどのような存在であり，それが相談行動とどのように結びつくのかなど，中学生の相談行動に影響する要因について検討する。なお，中学校は教科担任制であり，中学生は学級担任教師や養護教諭以外の教師と接する機会も多いため，相談相手は教師全般とする。

２．中学生の教師イメージと相談行動における利益とコスト

自分では解決できないような問題を抱えた時に，他者に相談することは重要な対処方略の一つである。相談行動は援助要請行動の一形態であり，本研究では生徒が悩みを抱えた際の教師への相談行動を援助要請行動の観点から検討する。

高木（1997）は，援助を要請する人としてその人物が適当かどうかは，その人物の特徴と援助のためにその人物に負担をかける出費の大きさなどから判断されると述べている。前者に関しては，年代などの基本属性や両者の関係の親密さなどが関連することが指摘されている。また，援助者の特徴に関して，援助者のイメージおよび援助者との関係性に関する研究（石田・堀・品川・兒玉・岡本・松下・大塚，2010；川幡・佐野，2014）では，援助者に親しみやすいイメージを抱いていたり，援助者を信頼し，関係が良好であったりする場合は，相談行動に結びつきやすいことが示唆された。

さらに，高野・宇留田（2002）は，援助要請を行うかどうかは，援助要請することと援助要請しないことの両方のコストと利益のバランスで決まると述べ，援助要請を増加させるためには，心理的コストを下げるために相談機関に対するイメージを改善することが大切であるとしている。したがって，援助要請者が援助者によいイメージをもっていると，相談行動へのコストが下がり，相談行動へ結びつきやすいといえる。

以上のことから，中学生の教師イメージや教師との関係性と相談行動との関連を検討することは，中学生の教師への相談行動を促すために重要であると思われる。特に本研究では，教師に相談することの利益やコストについて考慮することとした。

３．九分割統合絵画法によって教師イメージを把握することの意義

九分割統合絵画法（Nine-in-One Drawing Method；NOD 法）は，森谷（1986）によって考案された描画法であり，イメージの多様性と統一性を可能な限り同時に表現させるため，用紙を 3×3 に分割し，一つのテーマに対するイメージを 9 つの枠の中に描画させる方法を用いている。これにより，一挙に多くのイメージを把握することができ，多角的に情報を判断できるという特徴がある（森谷，1995）。NOD 法を用いた研究には，自己イメージ（横尾，2013），親イメージ（森谷・徳田，1998），

他者イメージ（殘華・石田，2010）などをテーマにしたものがある。また，NOD 法を分析する視点には，9 つの枠の全体から描画対象へのイメージを読み取るものと，それぞれの枠に描かれた内容から描画対象へのイメージや興味関心の程度を読み取るものの 2 つがある。森谷・徳田（1998）は，中学生を対象として NOD 法を用いた親イメージを調査し，登場人物の出現頻度や描かれた内容の分類など，様々な視点で分析を行っている。

援助要請者がもつ援助者のイメージに関する研究には様々なものがあるが，その多くは質問紙法によって調査が行われている（e. g.，川幡・佐野，2014；及川，2007）。しかし，人が他者に対してもつイメージは一つだけではなく，いくつかの異なるイメージをもつこともあれば，相反するイメージを抱くこともある（殘華・石田，2010）。中学生が教師に抱くイメージも多様であることが予想され，質問紙法だけではそのイメージを包括的に捉えることは難しいと考えられる。また，中学生の教師イメージは，これまで関わってきた多くの教師のイメージが積み重なったものでもあり，中学校の教師だけでなく，小学校時代の教師イメージが含まれている可能性もある。NOD 法はこうした中学生の複雑な教師イメージを多面的，統合的に明らかにできることが期待される。そこで本研究では，どの学校段階で関わった教師であるかは特定せず，個々の生徒がもつ多面的な「教師イメージ」を NOD 法で明らかにする。

４．本研究の目的

本研究では，中学生が教師に相談しやすくなるための要因を見いだし，教育相談活動を活性化することを目的として，以下の 3 点について検討する。まず，中学生が自分では解決できない問題に直面したとき，どの程度教師に相談したいと思うか（相談行動の意図），教師に相談することに関してどのような利益とコストを予期するかを明らかにする。次に，NOD 法に表された中学生の教師イメージの評価（良し悪し）や生徒－教師の関係性と，教師への相談行動の意図および利益とコストの予期との関連について検討する。最後に，NOD 法によって調査対象者を群分けし，各群に特徴的なイメージを検討することで，中学生の相談行動と教師イメージの関連を明らかにする。

方　法

１．調査対象者

調査対象者は，A 県内の公立中学校 2 校の生徒 240 名であった。内訳は 1 年生 117 名（男子 65 名，女子 50 名，性別無記入 2 名），2 年生 98 名（男子 40 名，女子 57 名，性別無記入 1 名），3 年生 25 名（男子 11 名，女子 14 名）であった。

２．調査実施時期

2016 年 6 月～7 月。

３．調査手続き

学級単位の集団法で実施した。封筒に入った質問紙や画材を授業担当教師が配付し，NOD 法と「描画後の質問」を実施した後，質問紙に回答させた。所要時間は約 40 分。

４．調査内容

（１）NOD 法：実施方法は，森谷（1995）を参考にした。あらかじめマジックインクで画面を 3×3

枠に九分割し，描画順序（右下から反時計回り）を書いた A4 判画用紙を調査対象者に配付した。教示は「『学校の先生』または『教師』という言葉から思い浮かぶイメージ（担任の先生に限らず，どの先生でも構いません）を自由に絵にして，1 つ 1 つのマスの中に描いてください。どうしても絵にできないときは，文字，記号，図形など何でもかまいません」とした。「描画後の質問」では，描かれた絵の枠の中に簡単な説明文を書かせた。さらに，各枠の絵によいイメージをもっているかを「はい・どちらでもない・いいえ」の 3 件法で判定させた。

（２）教師に対する相談行動：「中学生用友人に対する相談行動尺度」（永井・新井，2005b）の相談対象を「教師」に変更した（以下，「中学生用教師に対する相談行動尺度」とする）。自分で解決することが困難な問題が起きた際の教師に対する相談意図を把握する尺度である。「心理･社会的問題の相談行動」（7 項目）と「学習・進路的問題の相談行動」（4 項目）の計 11 項目，5 件法。

（３）相談行動の利益・コスト尺度改訂版（永井・新井，2008）：相談対象を「教師」に変更した。教師に相談することで予期される利益とコストを把握する尺度である。「ポジティブな結果（8 項目）」，「否定的応答（6 項目）」，「秘密漏洩（3 項目）」，「自己評価の低下（3 項目）」，「問題の維持（3 項目）」，「自助努力による充実感（3 項目）」の計 26 項目，5 件法。

５．倫理的配慮

学校長の承諾を得て調査を実施した。生徒には個人情報の保護や調査への協力は任意であることなどの倫理的配慮について教師が説明し，同意の得られた生徒に回答を求めた。また，本研究は広島大学大学院教育学研究科の倫理審査委員会の承認を得て実施した。

結　果

分析には質問紙の回答に不備があったものを除いた 234 名（1 年生 113 名＜男子 61 名，女子 50 名，性別無記入 2 名＞，2 年生 96 名＜男子 39 名，女子 57 名＞，3 年生 25 名＜男子 11 名，女子 14 名＞）のデータを使用した。

中学生用教師に対する相談行動尺度に対する確認的因子分析を行った結果，永井・新井（2005b）と同じ因子が得られた。次に，相談行動の利益・コスト尺度改訂版に対する確認的因子分析を行った結果，永井・新井（2008）と同じ因子が得られた。

１．中学生の教師に対する相談行動の意図と相談行動の利益・コスト

教師に対する相談行動の意図と予期される相談行動の利益･コストの学年差や性差を調べるため，学年および性別を独立変数，2 つの尺度の各下位尺度を従属変数とした多変量分散分析を行なったところ，有意な交互作用，性差はみられず，「学習・進路的問題の相談行動」において学年の主効果がみられた（$F(1, 226)=11.24$，$p<.001$）。多重比較（Tukey）の結果，1，2 年生よりも 3 年生の「学習・進路的問題の相談行動」が高かった（Table 1）。

２．中学生の教師に対する相談行動の意図と相談行動の利益・コストとの関連

調査対象者全体の 2 つの尺度の相関係数を算出した結果，「心理・社会的問題の相談行動」と「ポジティブな結果」に中程度の正の相関（$r=.54$），「否定的応答」（$r=.36$）と「問題の維持」（$r=.39$）には弱い正の相関，「秘密漏洩」（$r=-.14$），「自助努力による充実感」（$r=-.13$）には弱い負の相関が

Table 1　中学生用教師に対する相談行動尺度と相談行動の利益・コスト尺度改訂版の記述統計量

学年	1年生		2年生		3年生		主効果		
性別	男子	女子	男子	女子	男子	女子	学年	性別	交互作用
	(n=61)	(n=50)	(n=39)	(n=57)	(n=11)	(n=14)			
中学生用教師に対する相談行動尺度									
心理・社会的問題の相談行動	2.01	2.02	2.12	1.79	2.53	2.15	1.67	2.32	1.00
	(.97)	(.96)	(.96)	(.89)	(.93)	(.83)			
学習・進路的問題の相談行動	2.60	2.66	2.76	2.54	3.70	3.75	11.24 **	.06	.45
	(1.23)	(1.08)	(1.06)	(1.00)	(1.00)	(.67)			
相談行動の利益・コスト尺度改訂版									
ポジティブな結果	3.13	3.26	3.18	3.28	3.76	3.63	2.96	.05	.19
	(1.00)	(1.07)	(.86)	(.85)	(.74)	(.89)			
否定的応答	2.49	2.56	2.63	2.46	2.44	2.44	.27	.11	.94
	(.65)	(.68)	(.55)	(.59)	(.55)	(.69)			
秘密漏洩	2.53	2.65	2.57	2.36	2.36	2.14	1.04	.36	.64
	(1.07)	(1.18)	(1.00)	(1.08)	(1.17)	(1.24)			
自己評価の低下	2.56	2.92	2.80	2.77	3.09	2.76	.36	.00	1.67
	(.96)	(1.05)	(.92)	(1.03)	(1.29)	(1.03)			
問題の維持	2.84	3.09	2.77	3.04	3.03	3.48	1.17	3.80	.10
	(1.07)	(1.17)	(.99)	(.88)	(.69)	(.85)			
自助努力による充実感	2.87	2.85	3.00	2.85	2.94	2.60	.31	1.18	.34
	(.94)	(1.00)	(.94)	(.97)	(.88)	(.79)			

注)上段：平均値，下段：標準偏差　　**p<.01

みられた。「学習・進路的問題の相談行動」と「ポジティブな結果」に中程度の正の相関（r=.56），「問題の維持」には弱い正の相関（r=.32），「秘密漏洩」（r=-.17）と「自己評価の低下」（r=-.14）には弱い負の相関がみられた。

３．NOD 法による教師イメージの分類と相談行動との関連

（１）NOD 法による調査対象者の群分け：NOD 法の利点である多様なイメージを統合的に把握するためには，一定の枠数以上の描画が必要である。そこで，未記入枠以外の絵が描かれた枠が 6 つ以上で，描画後の質問にも回答した調査対象者を分析対象者に限定したところ，1 年生 95 名（男子 47 名，女子 46 名，性別無記入 2 名），2 年生 66 名（男子 26 名，女子 40 名），3 年生 22 名（男子 10 名，女子 12 名）の計 183 名となった。次に，NOD 法のイメージの評定では，先行研究に適切な基準となるものが見当たらなかったため，筆者らがイメージの「良し悪し」の枠数をもとに独自の基準を作成した（表 2)。そして，自身が描いた各枠の絵によいイメージをもっているかどうかについて「はい」と回答した枠の割合が多かった生徒をポジティブイメージ群，「いいえ」と回答した枠の割合が多かった生徒をネガティブイメージ群，「どちらでもない」と回答した枠の割合が多かった生徒を中立群，以上の 3 群に含まれず，「はい」と回答した枠としなかった枠，および「どちらでもない」と回答した枠が混在していた生徒を混在群に分類した。ポジティブイメージ群 69 名（37.7%），ネガティブイメージ群 26 名（14.2%），中立群 35 名（19.1%），混在群 53 名（29.0%）であり，人数比の偏りを検討するために χ^2 乗検定を行ったところ，有意な偏りがみられ（χ^2=24.02，df=3，p<.001），教師イメージをよくないと評定した生徒が 1 割程度存在することが示された。なお，各群の代表的な描画を Figure 1～4 に示した。

（２）各教師イメージ群と相談行動の意図および相談行動の利益・コストとの関連：4 つの群を独立変数，相談行動と相談行動の利益・コストの各下位尺度得点を従属変数とした 1 要因分散分析を

行った。相談行動では，全ての下位尺度（心理・社会的問題の相談行動 $F(3, 179)=4.36$，$p<.01$；学習・進路的問題の相談行動 $F(3, 179)=4.06$，$p<.01$）で群間の得点差が有意であった（Table 3）。多重比較（Tukey）の結果,「心理・社会的問題の相談行動」と「学習・進路的問題の相談行動」では，ネガティブイメージ群よりもポジティブイメージ群が高かった。一方，相談行動の利益とコストでは，秘密漏洩，ポジティブな結果，自己評価の低下（秘密漏洩 $F(3, 179)=7.61$，$p<.001$；ポジティブな結果 $F(3, 179)=5.54$，$p<.01$；自己評価の低下 $F(3, 179)=4.84$，$p<.01$）で群間の得点差が有意であった（表 3）。多重比較（Tukey）の結果,「ポジティブな結果」では，ネガティブイメージ群より

Table 2　NOD 法による調査対象者の群分けの基準

描画枠数	ポジティブイメージ群	ネガティブイメージ群	中立群	混在群
9枚	6枚以上をよいイメージと評価した場合。または，5枚をよいイメージで4枚をどちらでもないイメージと評価した場合。	6枚以上をよくないイメージと評価した場合。または，5枚をよくないイメージで4枚をどちらでもないイメージと評価した場合。	6枚以上をどちらでもないイメージと評価した場合。	その他のものすべて。
8枚	9枚の場合と同様。	9枚の場合と同様。	9枚の場合と同様。	9枚の場合と同様。
7枚	5枚以上をよいイメージと評価した場合。または，4枚をよいイメージで3枚をどちらでもないイメージと評価した場合。	5枚以上をよくないイメージと評価した場合。または，4枚をよくないイメージで3枚をどちらでもないイメージと評価した場合。	5枚以上をどちらでもないイメージと評価した場合。	その他のものすべて。
6枚	4枚以上をよいイメージと評価した場合。	4枚以上をよくないイメージと評価した場合。	4枚以上をどちらでもないイメージと評価した場合。	その他のものすべて。

Table 3　NOD 法による群別に見た中学生用教師に対する相談行動尺度と相談行動の利益・コスト尺度改訂版の平均点

	ポジティブイメージ群 (n=69)	ネガティブイメージ群 (n=26)	中立群 (n=35)	混在群 (n=53)
中学生用教師に対する相談行動尺度				
心理・社会的問題の相談行動	2.29	1.55	1.87	1.95
	(1.00)	(.93)	(.88)	(.91)
学習・進路的問題の相談行動	3.05	2.17	2.74	2.75
	(1.15)	(1.01)	(1.00)	(1.13)
相談行動の利益・コスト尺度改訂版				
ポジティブな結果	3.52	2.7	3.05	3.29
	(1.00)	(.88)	(.93)	(.91)
否定的応答	2.42	2.71	2.54	2.5
	(1.15)	(1.01)	(1.00)	(1.13)
秘密漏洩	2.08	3.05	2.45	2.84
	(1.04)	(.91)	(.73)	(.89)
自己評価の低下	2.45	3.24	2.89	2.93
	(1.06)	(1.05)	(.91)	(.95)
問題の維持	3.15	2.74	2.76	3.09
	(1.07)	(.85)	(.97)	(.99)
自助努力による充実感	2.66	2.92	2.90	2.93
	(1.03)	(.94)	(.84)	(.96)

注)上段:平均値，下段:標準偏差

もポジティブイメージ群と混在群が高く，「秘密漏洩」と「自己評価の低下」では，ネガティブイメージ群よりもポジティブイメージ群とネガティブイメージ群と混在群が高かった。

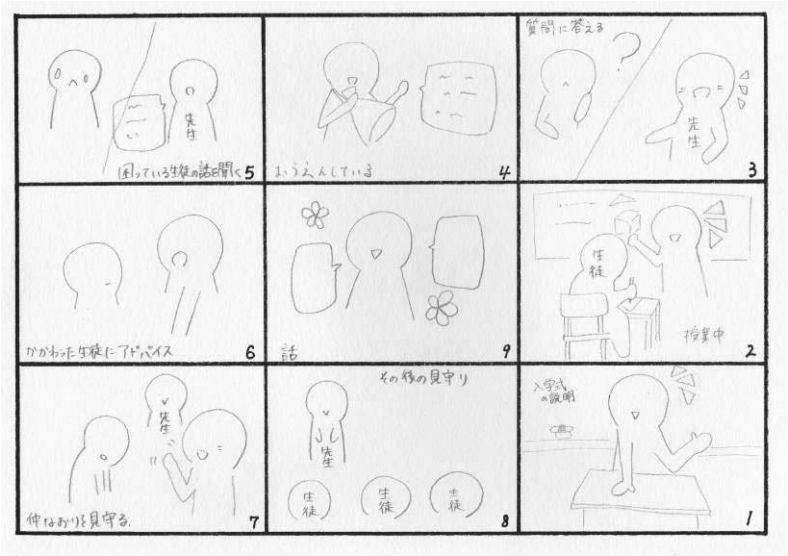

Figure 1　ポジティブイメージ群の NOD 法（模写）

（枠 1～9 すべてが「よい」イメージ）

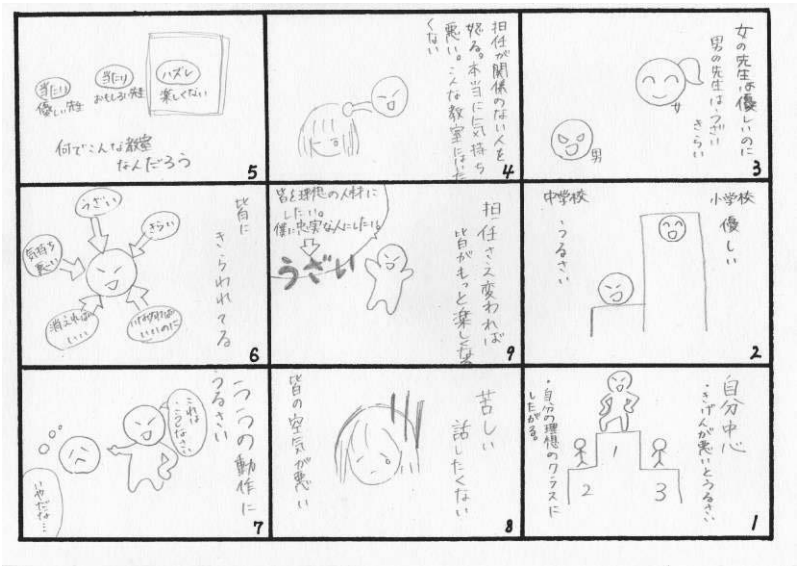

Figure 2　ネガティブイメージ群の NO 法（模写）

（枠 1～9 すべてが「よくない」イメージ）

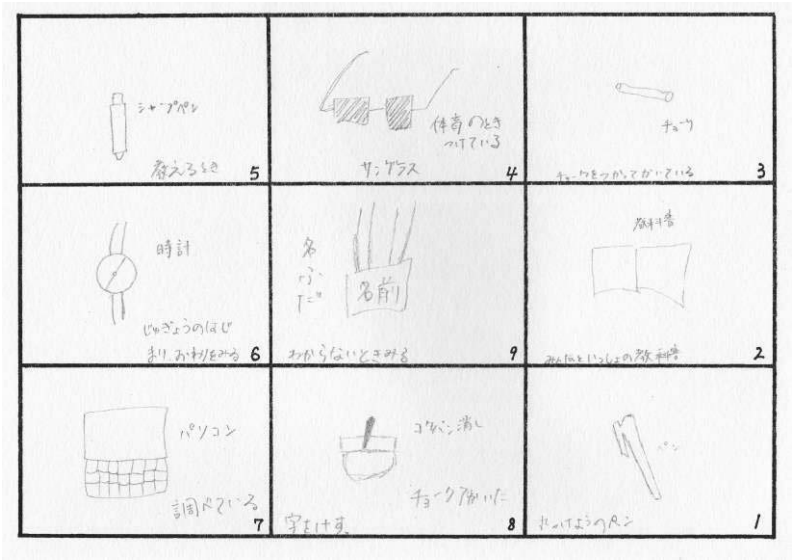

Figure 3　中立群の NOD 法（模写）

（枠 1～9 すべてが「どちらでもない」イメージ）

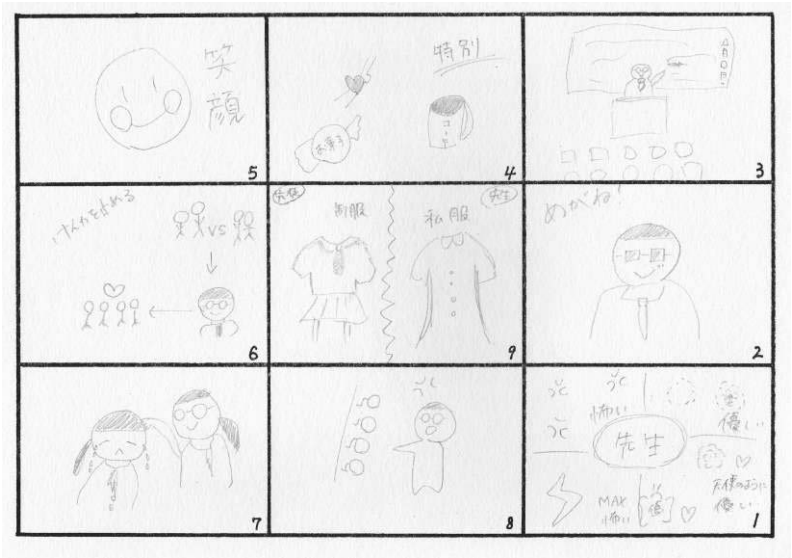

Figure 4　混在群の NOD 法（模写）

（枠 1・2 が「どちらでもない」，枠 3・5・6・7 が「よい」，枠 4・8・9 が「よくない」イメージ）

4．NOD 法にみられる教師イメージの分析

（1）登場人物の割合：4 群において教師や生徒などの登場人物が描かれた枠の総数と，これに占める登場人物が描かれた枠数の割合を示した（Table 4）。4 つの群を独立変数，各登場人物を従属変

Table 4

各群における NOD 法の登場人物

群	ポジティブイメージ群	ネガティブイメージ群	中立群	混在群	合計
枠数	*n*=621	*n*=234	*n*=315	*n*=477	*n*=1647
教師	384	137	127	267	915
	(71.6)	(70.3)	(47.0)	(63.9)	(55.6)
生徒	213	82	39	115	449
	(39.7)	(42.1)	(14.4)	(42.6)	(27.3)
その他	27	13	4	20	64
	(5.0)	(6.7)	(1.5)	(7.4)	(3.9)

上段：登場人物が描かれた枠数，下段：枠総数に占める登場人物が描かれた枠数の割合

数とした 1 要因分散分析を行った結果，教師が描かれた枠の割合（$F(3, 179)=4.71$，$p<.05$）と生徒が描かれた枠の割合（$F(3, 179)=6.80$，$p<.001$）が有意であった。多重比較（Tukey）の結果，教師の枠の割合，生徒の枠の割合がともに中立群よりもポジティブイメージ群とネガティブイメージ群で高かった。

（２）教師との関わりイメージ：先行研究（e. g. 石田ら，2010）より，援助要請行動の生起には被援助者が①援助者に対して親近感を抱いていること，②援助者へ信頼感を持っていること，③被援助者と援助者との関係が良好であることが重要であり，相談行動の生起には被援助者が援助者との「関わり」をどのように捉えているかが影響を与えていると考えられる。そこで本研究では，「教師と生徒が双方向的に関わっていること」を条件として調査対象者を選定した。「双方向的」とは，教師と生徒が 1 対 1 で関わっている，もしくは複数の教師（または生徒）の発言や行動に対して複数の生徒（または教師）が反応したり，感情を表したりしている個別の関わりとした。そして，NOD 法の「絵あり」（枠内に文字や記号のみが描かれたものではなく，絵が描かれていたもの）の枠に限定して調査対象者を選定した結果，教師との関わりを描いた生徒は 97 名，描かなかった生徒は 86 名で，教師と生徒の「関わり」が描かれた枠は 240 個であった。

教師との関わりを描いた生徒を「関わりあり群」，描かなかった生徒を「関わりなし群」とし，相談行動の意図と相談行動の利益・コストの各下位尺度得点について *t* 検定を行った結果，相談行動の利益・コストにおいて「自助努力による充実感」のみ有意差がみられ（$t=2.02$，$df=181$，$p<.05$），「関わりなし群」が「関わりあり群」よりも高かった。

「関わりあり群」（97 名）において，より多くの枠をよいイメージであると評定した生徒 54 名を「ポジティブイメージ優位群」，より多くの枠をよくないイメージであると評定した生徒 32 名を「ネガティブイメージ優位群」とし，相談行動の意図と相談行動の利益・コストの各下位尺度得点について *t* 検定を行った（教師との関係性を表す絵のすべてを「どちらでもない」と評定した 6 名，よいイメージとよくないイメージが同数であった 5 名は分析から除外）。「心理・社会的問題の相談行動」では分散の等質性が仮定されなかったため，Welch の検定を行った。その結果，相談行動の意

図では，いずれも「ネガティブイメージ優位群」よりも「ポジティブイメージ優位群」の方が得点は高かった（心理・社会的問題の相談行動 t=6.08，df=77.47，p<.05；学習・進路的問題の相談行動 t=2.22，df=84，p<.05）。また，相談行動の利益・コストの「自己評価の低下」では，「ポジティブイメージ優位群」よりも「ネガティブイメージ優位群」の方が得点は高かった（t=2.35，df=84，p<.05）。

考　察

１．中学生の教師に対する相談行動の意図と相談行動の利益・コストに対する意識

学年差については，「学習・進路的問題の相談行動」において有意な学年の主効果がみられ，3 年生は 1，2 年生よりも学習や進路に関する悩みを教師に相談しやすいことが示された。3 年生は卒業後の進路を決定するに際して，学習への意欲や不安が強まる時期であるため，学習や進路について教師に相談しようとする意図が高かったと考えられる。しかし，心理･社会的な問題について教師に相談するかどうかの意図には，学年による違いはみられなかった。どの学年も尺度平均値は低かったことから，中学生は全般的に教師に自分の心理的な悩みや人間関係の悩みを相談しようとする意図が乏しいものと思われる。

性差については，相談行動の意図や予期される相談行動の利益とコストのいずれの下位尺度においても有意な差はみられなかった。多くの研究では，一般的に女性の方が男性よりも相談を行うことに抵抗が少ないことが示されているが（e. g. 山口・西川，1991），援助を要請する対象ごとにみると，性差がみられるのは友人や家族などのインフォーマルな対象への援助要請に限られるという指摘もある（永井，2010；2012；永井・新井，2006）。よって，中学生にとって，学校教育という限定された場で関わる教師は，友人や家族とは心理的距離の異なる存在とみなされるがゆえに，女子であっても悩みを相談することに抵抗感が生じやすく，相談行動の意図や相談行動の利益とコストについて性差が生じないことが推察される。

２．中学生の教師に対する相談行動の意図と相談行動の利益・コストとの関連

教師への相談行動の意図と予期される相談行動の利益やコストに対する意識との関連を相関分析によって検討したところ，弱い～中程度の相関がみられ，高い値とはいえないものの「心理・社会的問題の相談行動」と「ポジティブな結果」，「否定的応答」，「問題の維持」には正の相関，「秘密漏洩」と「自助努力による充実感」には負の相関がみられた。これらの結果は，心理的な悩みや人間関係の悩みを教師に相談すると自分にとって好ましい結果が生じると予期する生徒が存在する一方で，教師に相談すると否定的に言われるのではないかといったコストや教師に相談しても問題は解決しないであろうことを予測する生徒が一定数存在することを示唆している。また，教師に悩みを相談すると秘密を無断で他者に漏らされるような不信感を抱いたり，自分で問題解決することで得られる充実感（自己成長感）が阻害されると感じたりする生徒がいることもうかがわれる。一般的に中学生は，心理的な悩みや人間関係の悩みは友人や親に相談することが多いが（永井･新井，2005a），教師に相談するかどうかについては，その利益以上にコストについて慎重に判断している可能性がある。

また，「学習・進路的問題の相談行動」も「ポジティブな結果」，「問題の維持」と正の相関が，「秘

密漏洩」と負の相関が見られた。学習や進路に関する悩みについても教師に相談することで解決の見通しがもてると予想するだけでなく，相談しても問題は解決しない，あるいは相談すると秘密を漏らされてしまうような懸念が生じることが示された。よって，中学生が様々な問題に直面した際の相談行動を促すためには，普段から生徒の秘密を守り，問題の解決が期待できるような信頼関係を構築しておく必要があると考えられる。

３．NOD 法における教師イメージと相談行動の意図および相談行動の利益・コストとの関連

（１）教師イメージと相談行動の意図および相談行動の利益・コストとの関連：まず，いずれの相談行動の意図についてもネガティブイメージ群よりもポジティブイメージ群の方が高く，教師イメージの良し悪しが相談行動を起こすか否かの意思決定に関連していることが示唆された。特に心理・社会的問題では，学年や性別による差がなかったことを踏まえると，個々の生徒が教師に良いイメージをもっていることが相談行動を起こすための重要な要因になると考えられる。

一方，相談行動の利益とコストについて，相談することの利益である「ポジティブな結果」では，ネガティブイメージ群よりもポジティブイメージ群と混在群の方が得点は高かった。教師に対するポジティブなイメージをもっている生徒は，教師に相談することで問題解決の見通しがもてたり，教師からの好ましい反応が得られることを予想したりすると考えられる。逆に，相談することのコストである「秘密漏洩」と相談しないことのコストである「自己評価の低下」では，ポジティブイメージ群よりもネガティブイメージ群と混在群の方が得点は高かった。教師に対してネガティブなイメージを抱いている生徒では，教師に相談すると秘密が他者に漏らされてしまうのではないか，自分の弱さを知られてしまうのではないかという懸念が生じやすいものと思われる。

また，混在群では，相談することの利益である「ポジティブな結果」とコストである「秘密漏洩」および相談しないことのコストである「自己評価の低下」において得点が高かった。NOD 法において教師に対する良いイメージと悪いイメージが混在する生徒は，教師や教師への相談に対して両価的な思いを有しやすいことが推察される。同時に，こうした両価性に基づく葛藤や不安を把握しやすい点は，多様なイメージの表出を可能とする NOD 法の強みであることが示唆された。

（２）NOD 法における登場人物の割合：森谷・徳田（1998）は，描かれた登場人物の出現頻度の分析から，調査対象者が誰にどれくらい興味をもっているかがわかると述べている。本研究では，ポジティブイメージ群とネガティブイメージ群は，中立群よりも教師と生徒の出現頻度が高く，教師に対する関心が高いことが推察される。逆に，これらの出現頻度が低かった中立群の生徒は，自分が描いた 9 枠の絵の多くを「どちらでもない」と評価しており，教師への関心や実際の関わりが乏しい可能性がある。生徒の相談行動を促すためにも，教師は生徒の目線に立って，好ましい教師イメージが形成されているかどうかに注意を払う必要があると思われる。

（３）NOD 法における教師との関わりのイメージ：教師との関わりを描いた生徒と描かなかった生徒を比較した結果，相談行動の利益とコストにおける「自助努力による充実感」のみ，後者の生徒の得点が高かった。NOD 法で教師との関わりを示さない生徒は，自分では解決できない悩みを抱えていても，自分の力で問題を解決しようとする思いが強いことが推察される。生徒が自分では解決できない悩みを抱えた際に教師に相談を持ちかけられるよう，教師は受容・共感的な姿勢で関わる

機会を増やしていくことが重要になると思われる。

一方，他の下位尺度で得点差がなかったのは，教師との関わりを描いた生徒の中にも，その内容をポジティブに捉えている生徒とネガティブに捉えている生徒が混在していたことによる可能性がある。そこで，教師との関わりを描いた枠のイメージがポジティブ優位であるかネガティブ優位であるかで生徒を分けて，相談行動の意図と相談行動の利益とコストとの関連を検討したところ，「心理・社会的問題の相談行動」と「学習・進路的問題の相談行動」では，ポジティブ優位な生徒の方が得点は高く，教師との関わりをポジティブに捉えやすい生徒は，様々な悩みについて相談行動を起こしやすいことが示された。逆に，相談行動のコストである「自己評価の低下」は，ネガティブ優位の生徒で得点が高かったことから，教師との関わりをネガティブに捉えがちな生徒は，教師に相談することで自分の弱さを知られたり，相談することで自分の弱さを認めてしまったりすることを恐れて，教師に相談しようとは思わない生徒もいたと考えられる。

まとめと今後の課題

本研究では，進路選択をひかえた 3 年生で「学習・進路的問題の相談行動」の意思が高かった。しかし「心理・社会的問題の相談行動」では，相談行動の利益とコストに対する意識との関連が多くみられ，教育相談で扱われることの多い心理的な悩みや人間関係の悩みを教師に相談することには葛藤や抵抗感が生じやすいことが示唆された。

また，対象への多様なイメージを把握することのできる NOD 法における教師イメージと教師への相談行動の意図との関連では，教師イメージがポジティブな生徒は相談行動の意図が高く，相談するときの「ポジティブな結果」を予期しやすいが，教師イメージがネガティブである生徒は相談することによって自身の秘密を漏らされることを恐れたり，自己評価の低下を感じたりしやすいことが示された。心理・社会的な問題に関する教師への相談行動の意図に学年差や性差がなかったことや，教師との関わりのイメージがネガティブである生徒よりポジティブである生徒の方が，相談行動を起こしやすいことから，教師に対する良いイメージが生徒の相談行動を促すための重要な要因であり，教師は日頃の生徒との関わりの中で，自身のイメージをポジティブに保つようなはたらきかけが必要になることが示唆された。

他にも，本研究では NOD 法そのものが，生徒の教師イメージを多面的な視点から把握するのに有用であることがうかがわれた。ただし，本研究で用いた教師イメージの分類基準が独自のものであったことから，今後は分類基準そのものの妥当性を検討していく必要がある。

引用文献

石田　弓・堀　匡・品川由佳・兒玉憲一・岡本祐子・松下姫歌・大塚泰正（2010）．ストレス脆弱性克服に挑む教育科学―ストレス状況において大学生が求める大学教員からの支援―　広島大学大学院教育学研究科共同研究プロジェクト報告書，**8**，55-74.

石隈利紀・小野瀬雅人（1997）．スクールカウンセラーに求められる役割に関する学校心理学的研究―子ども・教師・保護者を対象としたニーズ調査の結果より―　文部省科学研究費補助金（基

盤研究〈c〉〈2〉）研究成果報告書（課題番号 06610095）
伊藤美奈子（2009）．教育相談の在り方　不登校――その心もようと支援の実際　（pp105-114）　金子書房
伊藤美奈子（2006）．思春期・青年期の意味　思春期・青年期臨床心理学（pp1-6）　朝倉書店
川幡友里恵・佐野秀樹（2014）．スクールカウンセラーに対するイメージと相談室の運営に関する研究　東京学芸大学紀要総合教育科学系，**65**（1），169-178.
文部科学省（2010）．第 5 章教育相談　生徒指導提要　教育図書株式会社　pp92-126
森谷寛之（1986）．イメージの多様性とその統合―マンダラ画法について―　心理臨床学研究，**3**（2），71-82.
森谷寛之（1995）．子どものアートセラピー――箱庭・描画・コラージュ　金剛出版
森谷寛之・徳田由香（1998）．九分割統合絵画法に見る中学生の親イメージ　鳴門教育大学研究紀要，**13**，67-76.
永井　智（2010）．大学生における援助要請意図―主要な要因間の関連から見た援助要請意図の規定因―　教育心理学研究，**58（1）**，46-56.
永井　智（2012）．中学生における援助要請意図に関連する要因――援助要請対象，悩み，抑うつを中心として　健康心理学研究，**25**（1），83-92.
永井　智・新井邦二郎（2005a）．中学生における悩みの相談に関する調査　筑波大学発達臨床心理学研究，**17**，29-37.
永井　智・新井邦二郎（2005b）．中学生用友人に対する相談行動尺度の作成　筑波大学心理学研究，**30**，73-80.
永井　智・新井邦二郎（2008）．相談行動の利益・コスト尺度改訂版の作成　筑波大学心理学研究，**35**，49-55.
内閣府（2016）．平成 28 年度版　子供・若者白書（概要版）（PDF 形式）〈http://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/h28gaiyou/pdf_indexg.html〉（2017 年 1 月 25 日）
及川　恵（2007）．専門的援助に対するイメージの検討―大学生における悩みの開示に関する自由記述調査の結果から―　兵庫大学論集，**12**，51-59.
殘華ひとみ・石田　弓（2010）．九分割統合絵画法による他者イメージの理解　広島大学心理学研究，**10**，185-200.
高木　修（1997）．援助行動の生起過程に関するモデルの提案　関西大学社会学部紀要，**29（1）**，1-21.
高野　明・宇留田麗（2002）．援助要請行動から見たサービスとしての学生相談　教育心理学研究，**50（1）**，113-125.
山口智子・西川正之（1991）．援助要請行動に及ぼす援助者の性，要請者の性，対人魅力，および自尊心の影響について　大阪教育大学紀要Ⅳ部門，**40**，21-28.
横尾奈央子（2013）．九分割統合絵画法を通してみる留学生の適応感―祖国と日本のはざま―　心理臨床学研究，**31（2）**，234-244.